激震地に生きる

廃墟のパースペクティヴ

木辺弘児

大阪文学学校・葦書房

激震地に生きる

廃墟のパースペクティブ

江苏工业学院图书馆
藏书章

木辺弘児

大阪文学学校・葦書房

木辺弘児（きべ・こうじ）
1931年神戸市生まれ。大阪大学理学部卒。
企業の研究開発職に従事するかたわら1980年頃より小説を書きはじめる。「水果て」で第87回、「月の踏み跡」で第92回芥川賞候補となる。
著書：『沖見』（編集工房ノア）
『水果て』（編集工房ノア）
『遠い蟬』（霧工房）
『少年の火』（編集工房ノア）
『ラスト・パントマイム』（編集工房ノア）
『海ユリの時間』（編集工房ノア）
『釘／被災記』（霧工房）
住所：西宮市大畑町5-30-602住田方（〒662）
電話：0798-64-1540

廃墟のパースペクティヴ
一九九七年一月一七日発行

著　者　木辺弘児
発行者　長谷川龍生
発行所　大阪文学学校・葦書房
大阪市中央区谷町七―二―二―三〇五（〒五四二）
電話〇六（七六八）六一九五
FAX〇六（七六八）六一九六
印刷製本　日本電植株式会社
発　売　（株）星雲社
電話〇三（三九四七）一〇二一
FAX〇三（三九四七）一六一七
©1997　Kōzi Kibe
不良本はお取り替えいたします

廃墟のパースペクティヴ

装幀　林哲夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

廃墟のパースペクティヴ＊目次

暴力 5
寒行 29
メランコリア 41
たらい回し 59
朝霧 81
啓蟄 99
ど、演歌 111
ニューヨーク 155
冬眠 169
杭を打つ土地 197
震災とヒロシマ
——あとがきに代えて 278

暴力

一月十七日（火）　午前五時四十六分

そのとき私はマンション五階の自室で、なかば目覚めていた。数日前からの風邪が、いっこうに良くならない。今日は予定をキャンセルして、一日、寝ていようか……、そんなことを考えていたようだ。

突然、何の前触れもなしにガーンと床から突き上げられ、突き落とされる。反射的に頭をかばったものの、何が起こったのかわからない。上下、左右、前後、斜め、あらゆる方向に叩きつけられるその動きは、〝揺れる〟といった言葉を超え、何ともたとえようがない。左から本がなだれ落ちて書棚もろともベッドにかぶさり、右の押入れの、板の辷り戸は二枚とも弾き飛ばされて、その後ろから押入れの荷物がのしかかる。ドアの向こうのリビングルーム、隣の和室、このマンションの上下の部屋、近隣の二階建て住宅、――それらあらゆる場所で物の崩落する音が合成され、地響きになり、闇の中でこの暴力をふるう相手の容易ならざる巨大さを直覚する。

「血がでてる」と隣室から妻の声。しかしドアまでの空間は崩れた物で埋まり、近づけな

い。上体だけむりやり起こし、片足で床に立ち、残りの足を物のあいだから強引に引き抜く。頭からパジャマの肩にかけてはガラス片だらけだが、頭上のかすかな薄明の方へ片手を思いきり伸ばすと、指がベランダ側のガラス戸にかかり、引くとわずかに動く。それから一分近くもがいて、ともかくもベランダへ出ることに成功する。まだ大きく揺れている外は、東の空が白みかけ、朝霧に似た赤黒いもやが地表を重く覆っているのが不気味だ。（後でわかったことだが、それは倒壊家屋から立ちのぼった土埃であった。）南の、阪神間の海沿いで、空がフラッシュを浴びたように何度も光り（大地震のさいの空中発光）、はるか東の武庫川堤防あたりでは、オレンジ色の閃光が横に走る。これは送電線のスパークか。

ベランダから隣の部屋に入ると、妻のふとんの上には三段重ねのタンスがばらばらに落ち、奥へは行けない。細身の妻はリビングルームへ脱出した模様。動かぬフスマに体当たりし、突き破ってリビングへ入ると、倒れた食器棚の下、散乱する割れ物のあいだに妻がうずくまっている。首をまさぐると血でぬるぬるし、新たに吹き出る血がなおも床のジュウタンにしたたっているようだ。「どうしよう、頸動脈を切ったみたい」「こんなに出血したら死ぬわ、足が冷たくなってくる」妻は失血死の不安を訴えるが、暗いので傷口がどこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かもわからない。寝室の倒れた家具のあいだから、手に触れるかぎりのタオル、下着の類を引きずり出し、出血していると思われる場所を抑えさせるが、その間にも余震が続き、新たな食器が落ちてくる。とりあえずそのままの姿勢で、かすかに白みはじめている西のベランダへ身を寄せ、明るくなるのを待つしかない。

隣の娘夫婦のことも気になり、転倒家具の隙間をもぐってベランダに戻り、隔壁ごしに「アンドウ君（娘婿）だいじょうぶか」と叫ぶが、かすかな女の声が返ってくるだけで、意味は不明。娘は生きているらしいが、三才と、生後二か月の二人の女児の安否が心配だ。最初ベランダへ出たとき隣で男の声がしたので、アンドウ君がいるとばかり思っていたのだが、それは錯覚で、彼はどうもいる様子がなく、母子三人は倒れた家具の下にいるらしい。足もとにあった材木で隔壁を破り隣のベランダに入ると、さらに隣のK氏が向こうの隔壁ごしにのぞいてくれたので、妻が怪我していること、娘の家は男手なく、母子三人は家具の底にいるらしいことを訴え、助けを求める。外の道では、早くもバイクで前方の高木の集落へ走る男が見える。

ふたたびリビングにとって返し、妻の首のタオルをとって、ていねいに拭ってみると、傷はどうやら首ではなく、血は頭から流れ落ちてきたものらしい。その頃には、西のベラ

ンダからの明かりで物の形も色も見えるようになり、妻の頭頂部やや右寄りに大きな血のこぶができ、髪と一緒に固まりかけているのを発見する。足のアキレスけんのあたりも切っていて、傷口が開いているようだが、詳細はつかめず。まもなくK氏が、このマンションに住む医者のO氏をベランダ伝いに連れてきてくれる。O氏は携帯ランプで傷を調べ、出血はかなり多いが頭も足も外傷だけだろう、血も一応止まっているから、あまり動かぬようにして、明るくなったら応急手当を受けるようにと、ありあわせの布と紐でしばってくれる。

隣の部屋には、やはりこのマンションに住む学生たち三人がきて、閉じこめられている母子の救出にかかってくれる。家具の隙間からマリコ（娘）とようやく話ができ、子供二人も怪我はないとのこと。同じマンションに二十年近くも住みながら、今までろくに挨拶も交わさなかった老年、中年、若者が、今、声をかけ合い機敏に行動して、人間を助け出そうと協力してくれるのが、夢のようだ。結局、手前に折り重なる家具をずらし、母子三人を倒れたタンスとベビーベッドのあいだから引き出すのに、半時間近くかかる。

マリコ（母親）は、たまたまキリコ（二か月）に授乳していて胸に抱いており、フーコ（三才）も足もとに寝ていたので、倒れた家具類の三角形の隙間に入り助かったらしい。

二人の子供は閉じこめられていたあいだ静かだったが、引っ張り出したときフーコは全身で震えていた。誰かが差し出した毛布にキリコを包み、フーコには小さなシャツやトレパン、オーバーなど、そばにある衣類を着せて足をさすってやる。怪我人と母子三人ともども、真っ暗な階段を伝ってマンションの外に出たのは、七時前後だろうか。とりあえず中津浜線（南北幹線道路）の対岸にある高木消防署の救護室に避難する。

消防署だけに電気は生きており、テレビで〝淡路島北部を震源とする地震〟の第一報を見る。怪我人三名、と言っている。マンションの若い人たちは、高木の街で家の下敷きになっている人がいると救出に駆け出し、入れ替わりに寝間着、はだし姿の人々が両手をあげて車道を横切り、消防署に逃げてくる。南の阪急神戸線、西の今津線の方角に数か所、煙。しかし消防車も署員も全員、出払っており、テレビは第一報の後、ふだん通りの派手なコマーシャルを流し続けている。それを見つめる避難所の人たちは、みんな無言、無表情だ。

眼鏡をなくして遠くはよく見えないが、マンションに戻って我が家と隣のガス元栓を閉め、転倒をまぬかれた冷蔵庫からミルク、ジュース、トマト、パンなど、隣の子供部屋か

らは親子の衣類、おしめ、ティッシュペーパー、絵本などをかき集め、何度も避難所へ運ぶ。増えはじめた車の列を手をあげて止め、中津浜線を横切るのは危険きわまりない。動転しているので、パジャマズボン、素足に靴をはき、おしめのつもりで玄関の靴べらを持って走ったり。避難所の奥で授乳しているマリコに笑われる。フーコは、マンションの内にも外にも折り重なっている家財道具を見て「グシャグシャ、グシャグシャ」とはしゃぎ、母乳をたっぷりもらったキリコは、生まれてはじめてのような笑顔を見せている。

八時すこし前頃、やはり直下型の強い余震。

そのときたまたま、マンション各所帯の安否確認作業を手伝っていて、同じ五階の他人の部屋に、一時、閉じ込められてしまう。

妻の怪我も気になり、一ブロック北のC病院の様子を見にいくと、院内は真っ暗で水びたし。ほとんど瀕死と思われる負傷者がロビー、廊下から前庭にまで寝かせられ、中には明らかに遺体と思われるものも。看護婦が数人、補液瓶を持って走りまわっているが、二人の当直医師は、次々に運びこまれる負傷者の瞳に携帯ランプの光を射し入れて、生死の判定をしているだけ。まだ息のある人には、看護婦が点滴をしようと焦っている。生命にかかわらぬ怪我など、とても診てもらえる状況ではない。あきらめて近隣の開業医、数軒

をまわってみるが、いずれも半壊状態で医師は不在。おそらく、どこかへ召集をかけられているのだろう。

高木の街の入り組んだ路地は、崩れた家屋にふさがれ、大半が通行不能。戦前の古い家は、ほとんどが全壊。一階がつぶれ、二階が道路に載っているケースも多い。昔の農家をアトリエに改造した津高和一氏宅も、瓦と壁土と材木の一山と化し、声も出ない。男の怪我人を一人、戸板に載せ、ワゴン車に入れている現場に出会う。唇が腫れあがって頬のなかばまで裂け、すでに死者の表情だ。

その後、家と道路の区別もなくなった街を一巡りして避難所に戻ってくるまで、群がる人々の中に目撃した死者、重傷者の数は、いったい何人にのぼるだろう。老人が多いようだが、そのほかにも後頭部がつぶれている女、砂の中から掘り出したような男の子など。そのすべてを思い出すことは、とても出来ない。

公衆電話は通じている、という避難所の噂で、近くのボックスに行ってみるが、すでに二、三十人も行列しているので、やはり断念。十一時ごろ、人がいないのを見はからって消防署の電話を借用（盗用）し、ようやく伊丹、宝塚、横浜、東京の親戚に連絡。伊丹、宝塚、全員無事だが、家はかなり傷んでいるらしい。宝塚のFに、車で妻を災害地から離

れた医者に運ぶことを頼むが、Fの車が到着したのは三時間後。道路渋滞はますますひどく、中津浜線はすでに長い駐車場と化し、国道一七一号線や新幹線の高架も、門戸や甲東園で今津線の上に落ちているという。怪我人を運ぶどころか、車ではもうどこへも行けそうにない。さいわい妻の傷は、その後、固まっているようだ。

昼、食べるものなし。フーコのミルクをコップ一杯わけてもらう。

午後、マンションの各部屋へ入れる通路のみをようやく作るが、床も転倒家具も衣類もガラスまみれで危険。室内も靴のまま歩く。重い物ほど遠くへ動いている。台所の棚にあった鉄の塊のような電子レンジが、食卓を越えて二、三メートルも飛び、逆に軽い物はほとんど動かず、前日、妻が焼いたケーキが一個、オーブンの元の位置に奇跡のようにある。あの瞬間、重力の向きが水平方向に変わった、とでもいう風に。

ポリバケツを探し出し、消防署の貯水槽に残っている水を二杯わけてもらうが、聞きつけた希望者がたちまち長い行列を作ったので、途中で打ち切られる。すぐに給水車が来るから、ということだが、動けない道路を通って来るはずもない。

夕方、コープ（灘・神戸生協）で救急物資を売っているという噂。北風に吹かれて一時

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com